

『七破風の屋敷』の噂する「群集」

—呪いの予言と幸運な結末—

中 西 佳 世 子

要 旨

ナサニエル・ホーソーンの故郷セイレムを舞台とする『七破風の屋敷 (*The House of Seven Gables*)』(1851)は過去と現在の連続性を前面に出した作品である。その序章の語り手は、本体の物語が代々のピンチョン家にふりかかる災いを描く「呪いの成就」の物語であると予告する。しかし、実際の物語は「機械仕掛けの神」を用いたかのように、ピンチョン家の末裔に唐突に訪れた幸運な結末で閉じられる。こうした序文と本体の矛盾および不自然な物語の結末は、この作品の欠陥とされてきた。しかし、物語におけるセイレムの噂をする「群集」の存在、ならびに物語を通して継続的に行われるプロヴィデンスへの言及に注目すると、ホーソーンが「呪いの成就」と「呪いの解体」という、相反する方向に進むプロットを巧妙に組み込んでいることが分かる。物語の語り手は、噂をする「群集」の側の視点で「呪いの成就」のプロットを展開させる一方、その「群集」とは距離をおき、彼らには知り得ないプロヴィデンスの計画があることを示唆しながら「呪いの解体」のプロットを展開させるのだ。本論は『七破風の屋敷』の噂をする「群集」とプロヴィデンスへの言及に注目することで、相反するプロットを持つ物語の二重構造を明らかにし、そこに提起される「個人」と「集団」の問題、および、作家と社会の関係性を考察するものである。

キーワード：物語の二重構造、ホーソーンと社会、プロヴィデンス、噂、セイレム

はじめに

ナサニエル・ホーソーンの二作目の長編『七破風の屋敷 (*The House of Seven Gables*)』(1851)は、過去と現在の歴史的連続性を前面に出した作品である。その序章の語り手は「ある世代の悪行は子々孫々まで生きのび、一時的な美点はすべてこれをはぎとって、ついには純粹にして抑制不可能な害悪となりはてるにいたる」(II, 2)¹⁾という教訓を準備したと述べ、本体の物語がピンチョン家に禍をもたらす「呪いの成就」を描くものであることを予告する。しかし、実際の物語はピンチョン家の末裔に突然訪れる幸運な結末で閉じられる。しばしば、こうした序文の予告と本体の内容との矛盾、そして唐突な問題解決によるハッピーエンディングはこの作品の欠陥と指摘されてきた。²⁾しかし、そうした一見矛盾し、安易に見える作品構造に作家が重要なテーマを提示している可能性はないだろうか。本論は、物語における噂をする「群集」の存在、ならびに、物語を通して行われるプロヴィデンス³⁾への言及に注目することで、「呪いの成就」と「呪いの解体」という、相反する方向に進むプロットの存在を前景化し、その二重の

構造によって提示される、「個人」と「集団」および作家ホーソンと社会の関係性を考察するものである。

1. ホーソン作品の「群集」

本題に入る前に、まず「群集」という語の扱いと、ホーソン作品に描かれる「群集」の特徴、ならびにその批評の流れを確認しておきたい。広辞苑（第六版）では、「群集」とは、「群がり集まった大勢の人（群衆）」、生態学的な意味における「一地域内に何らかの関係を持って生活するすべての個体群」、あるいは心理学的な意味における「多数の人間が一時的、偶発的に集まってつくられた集団」などとして定義されている。しかし、この概念を研究の対象としてきた社会学、心理学などの分野においても「群集」に対する解釈は様々な広がりを持つ。「群集」とはどれぐらいの人数の集まりを言うのか、一定の価値観を共有する人の集まりなのか、偶然集まった人の集団を指すのかといった点だけを取りあげても、文学研究の範疇を超える。それゆえ、「群集」を扱う文学批評では、その議論においてまず何を「群集」とするのかを定義し、作品や作家、あるいは時代やジャンルを限定した上で、創作上における「群集」の機能、作品テーマや作家との関連などが論じられてきた。⁴⁾ 本論においても、『七破風の屋敷』に描かれる、何世代にもわたって濃厚な近隣関係を築き、共同体の噂を共有してきたセイレムの人々の集団をその議論における「群集」と定め、考察をすすめることにしたい。

ここで『七破風の屋敷』の「群集」に限らず、ホーソン作品に描かれる「群集」には、ある種の傾向があることを概観しておきたい。ホーソン作品では多くの場合、物語の時代背景が明確にされており、そこに登場する集団も、おのずから時代性を帯びることとなる。例えば、17世紀を背景とする作品群では植民初期の「神権政治」、「魔女ヒステリー」などに関わる、「ピューリタン」、「クウェーカ教徒」、「インディアン」、「異教徒」の集団が描かれる。また、独立戦争が起きる18世紀を背景とする作品群では「フレンチ・アンド・インディアン戦争」、「王党派と独立派の対立」などに関わる集団が登場する。ホーソンの現在である19世紀を背景とする作品群ではその集団も多様性を帯び、「政党员」、「デモクラシーの民衆」、「都市の大衆」、「社会改革運動家」、「発明家や投資家」など当時の世相を反映する集団が登場する。さらにこれらの共時的集団だけでなく、過去から現在へ連なる亡霊の群れのような通時的集団もホーソンの「群集」に加えておくべきであろう。こうした多種多様な「群集」に対し、“crowd,” “multitude,” “townspeople,” “mob,” “people,” “throng,” “mass,” “masquerade,” “march,” “procession”などの語を用いて、作家はそれぞれの造形を行っている。

こうしたホーソンの「群集」はこれまでも批評の関心を集めてきた。主なものとして、ホーソンの「群集表象」が持つ文学技法的效果を考察する新批評のアンダースン（1952）、デモクラシーにおける「民衆」に対する作家の見方を論じるジフ（1981）、「集団」と「個人」の一体

化を危惧する作家の姿勢に注目するミルズ (1986)、「群集の噂」が持つ機能に注目するハーシュバーガー (1994)、「都市の群集」に焦点をあてるエステーヴ (2003) などが挙げられる。⁵⁾ これらの批評では論点の相違はあるものの、一方で、ホーソーンが描く「群集」は、総じて現実世界に存在する人間集団の忠実な写実というよりは、文学技法的機能を持ち、象徴的意味を帯びた「群集」であるという認識、また、ル・ボンの古典的群衆論である『群衆心理』(1895)が扱うような、「暴徒」と化するフランス革命時の群衆とは一線を画する「群集」であるという認識が共有されてきたといえる。ホーソーンは、アメリカン・デモクラシーの民意を左右する民衆は、バランス感覚を有し、正しい判断を行う「群集」であって欲しいと願うのだが、そうした作家の民衆に対する期待や警告、失望などに様々な文学的表象が与えられた「群集」が作中に登場するのだといえる。⁶⁾ 本論でも、こうした認識を念頭に置き、『七破風の屋敷』の噂をする「群集」の特徴とその意義を読み解いていく。

2. 「呪いの成就」という枠組み

『七破風の屋敷』の物語の現在は19世紀のセイレムであり、17世紀の植民地時代から続くピンチョン一族の屋敷が主な舞台となる。その第一章では序章の予告どおり、呪いの発端から現在に至る何世代ものピンチョン家の負の歴史が描かれる。ピューリタンである初代のピンチョン大佐が真水の湧き出るマシュー・モールの土地を得たいがために、モールを魔法使いとして告発し、処刑する。死の間際にモールはピンチョン家に呪いをかけ、ピンチョン大佐はモールの土地に建てた屋敷の落成式の日に血を吐いて死ぬ。こうして成就した呪いを皮切りとして、その後、何世代にもわたってモールの呪いはピンチョン家の災いとして現れ、ピンチョン大佐のように血を吐いて死ぬ者や身内殺害の嫌疑で投獄される者まで出てくる。

このピンチョン家の暗い歴史が紹介される第一章は、センテナリー版で30頁ほどにおよぶ冗長なものであるが、ここで重要な役割を果たすのが噂の存在である。「言伝え (tradition)」(II, 7, 16)、「村のおしゃべり連中 (village gossips)」(II, 9)、「多くの噂 (many rumors)」(II, 16)、「迷信じみた畏怖 (superstitious awe)」(II, 16)、「因習的な町のお喋り達 (traditionary gossips)」(II, 19-20)、「世間の人の想像力 (popular imagination)」(II, 21) といった噂にまつわる語、「断言されたものだ (It used to be affirmed)」(II, 29)、「断言した (averred)」(II, 11, 22)、といった噂が伝えられる語の頻繁な使用によって、共同体に浸透するピンチョン家の噂の存在が前景化される。こうして、ゴシップや噂は「倒れ埋もれて、はるか以前に土と化してしまった木の幹所在をさし示す毒キノコのように」何世代にもわたって生え出てくるのだ (II, 16)。

この章では、噂の存在に加え、それを広める共同体の人々の濃厚な関係性もまた浮彫りにされる。例えば、ピンチョン大佐が血を吐いて絶命する現場で「神様がやつに血をのませたのだ」というマシュー・モールの呪いの声が聞こえたという噂が広まる。このことは、屋敷で呪いの

声を聞いた「興味津々の群集 (the curious crowd)」(II, 15) の構成員が、かつての魔女狩りで「村中に広まる糾弾の声 (the general cry)」を挙げ「暴徒の極みと化した群集 (the maddest mob)」(II, 8) を構成し、「首つりの丘」に集まってモールの呪いの声を聞いた「群集」を構成した人々でもあったということを示唆している。そして彼らは、ピンチョン大佐がモールの跡地に屋敷を建てたときに互いに眉をひそめあった「村のお喋り連中 (the village-gossips)」でもあり、大佐の告別式における牧師の美辞麗句の弔辞の陰で、それとは正反対の噂をささやいた(II, 17) 人々でもある。17世紀の濃厚な近隣関係と噂は世代を超えて引き継がれ、相変わらず「因習的な町のお喋り達 (traditionary gossips)」は、ピンチョン家の遺伝的素質を体現する子孫が出現すると「またピンチョンじいさんが現れた」(II, 20 傍点筆者) と噂をするのだ。このように、第一章では、当初は曖昧にされていた噂の出所が、親密な関係を持つ共同体の「群集」にあることが徐々に前景化される。彼らは何世代にもわたってセイレムに住みつき、隣人と村の出来事に強い興味と関心を抱き、冠婚葬祭や事件が起きる度に同じ場集い、そこで目撃した出来事を噂として広めていく、濃厚な人間関係を持つ「群集」なのである。隣人の言動を厳しく監視し合い、17世紀のセイレムの魔女狩りの狂気を招いたピューリタンの共同体のメンタリティが、19世紀の噂をする「群集」にも引き継がれているのだ。彼らは信仰が薄れた19世紀の現代になっても、噂を再生産して、共同体の集約的記憶を確認しあう「群集」だといえる。

第一章でもうひとつ注目すべき点が、噂を流布する主体に読者を巻き込む「語り声」の存在である。冒頭で語り手は「今述べた町へ時々訪れる私 (I) は、ピンチョン通りを通り抜けることを欠かしたことは滅多にない」(II, 5) と一人称単数の “I” を用いて、語り手自身の経験として物語を始める。しかし、土地争いの説明の段になると「我々の (Our) 知識は、主として言い伝え (tradition) によるもの」(II, 7) と、一人称複数の “we” が用いられ、その主体に読者が含まれる可能性が示唆される。続いて語り手は、ピンチョン屋敷を建てた大工の棟梁がモールの息子であったことについて、「読者 (the reader) は特異に思うかもしれない」と述べ、その屋敷の様子は「筆者の思い出 (the writer's collection) の中で」あまりになじみの深いものであると述べる (II, 10)。ここで、語り手は「書き手 (writer)」と「読み手 (reader)」という関係性、すなわち噂を「伝える側」と「聞く側」という関係性を語り手と読者の間に構築している。さらに「もし我々はその鏡の秘密を知っていたら、その前に座って鏡が映し出すことを喜んで我々の頁に写し取りたいところだ (Had we the secret of that mirror, we would gladly sit down before it, and transfer its revelations to our page)」(II, 20) と、“we” を主体とする仮定法によって「書き手」と「読み手」が共に噂の発信者となる関係性へと深められる。やがて章の終盤では「我々が主張することによって比喩的に表現する中に (in what we figuratively express, by affirming that . . .)」(II, 21) と、両者は共に噂を主張する関係となり、さらに「我々はこれまで進んで (we have been willing to) この尊敬すべき屋敷の描写につとめてきた」(II, 28) と積極的に噂に関与していたことになる。そして語り手は、「まもなく我々の物語 (our

narrative) を始める」(II, 29) と章を締めくくり、すっかり噂を聞き広める主体に巻き込まれた読者は、現代の物語が展開し始める第二章の冒頭では語り手とともにヘプジバーの着替えを覗き見する共犯者となって、物語の展開を追うことになる。もちろんホーソーンは“authorial we”という一般的な語りの技法を巧みに利用して“we”の主体を曖昧にしているわけだが、周到に準備された語りの主体の移行には、噂をする当事者側に物語外の読者を巻き込む作家の戦略が見てとれる。こうして、現代の物語が始まるまでに、セイレムの噂をする「群集」と同様に、読者もまた、ピンチョン家にふりかかる災いを「呪いの成就」として解釈する思考の枠組みを身につけることになる。

3. 「呪いの成就」と噂の共犯関係

しかし、マシーセンが指摘するように、代々のピンチョンの不幸は、初代ピンチョンの悪行が招いた「呪いの成就」というよりは、その遺伝的体質や一族の気質がもたらす結果である(326)。例えば、これまでに語られた、独立戦争でイギリス側について財産没収されそうになったり、娘がモールの怨恨の犠牲になったりした事例などは、いずれもピンチョン一族の傲慢、強欲、貴族意識、目的の遂行の為に手段を選ばない冷酷な気質が招いた災いである。そして時折血を吐いて死ぬものが出てくるのも、卒中を起こしやすい遺伝的体質によるものだ。そもそもピンチョン家に呪いをかけたとされるモール一族で直接の危害を加えたのは、アリス・ピンチョンに催眠術をかけて彼女を心身の破滅に追いやった大工のモールのみであり、この場合でも初代ピンチョンの呪いというよりは、当代のピンチョンの強欲と高慢が引き金、なっている。

そしてここで重要なことは、ピンチョン一族に、災いの原因が彼ら自身にあると認識させることを妨げているのが呪いの物語だということである。彼らが、身に降りかかる不幸な出来事を「呪いの成就」という物語に帰することで「呪いの成就」が再生産される。そして皮肉なことには、「呪いの成就」という物語によってピンチョン一族は、ピンチョン大佐が願ったものとは異なる形で、その貴族性を維持するのだ。例えば、ヘプジバーは「卑しい身分」のホルグレイヴが呪いの話に触れた時、「受け継がれた呪いという陰鬱な威厳に触れられて嬉しくなくもなかった」(II, 46) のであり、遠縁のフィービーにも「ピンチョンの災いはすべてその魔法使いとのいさかいから始まった」という呪いの物語を度々聞かせている(II, 184)。さらにピンチョン達の亡霊は真夜中に「過去の灰をつついては、まるで火のおきでもかきだすように言い伝えをかきだした」(II, 278-79) のであり、幽霊までもが加担して「七破風の屋敷の部屋部屋や炉辺に蜘蛛の巣や煙の煤のようにたゆたっている家族の言い伝え」(II, 123) の色が褪せないように努めるのだ。こうしてピンチョン家の呪いの物語は、一族を特別なものにする為の「世襲財産の一部」(II, 21) になったのである。零落したピンチョン一族にとっては、古ぼけた七破風の屋敷とモールの呪いが、彼らを平民から区別する由緒ある貴族の証なのである。そして何より

呪いの物語を維持することで、彼らは身に降りかかる災いの原因を初代ピンチョンとモールの争いに帰することが可能となり、自分達の誤りに向き合わずに済むのだ。こうして本質的な問題は解決されないまま、呪いの物語は一族の中で語り継がれることとなる。

しかし、ピンチョン家が呪いの物語によって共同体における存在意義とプライドを維持するためには、その呪いの物語が共同体の人々にも共有される必要がある。人々が実際に噂をする場面はほとんど作中で描かれないが、強い好奇心を持ち、噂を囁き合い、共に行動する集団の存在が物語の展開とともに次々と前景化されていく。例えば、開店と同時にヘブジバーの1セントショップに次々と客が来る場面からは、彼女が仕入れをしたり、屋敷の一角を改装したりする様子を観察し、その噂を広めてきた近隣の人々の存在が浮かび上がる。実際に、ジェフリー判事の命令で屋敷の隣人や出入りの物売りたちがピンチョン家を監視していたことが後に明らかになる。また、ヴェナー爺さんの「クリフォードが帰ってくると噂でもちきり」(II, 66)という言葉はヘブジバーを怯ませ、店には「ピンチョンばあさんの兄さんがどうしているか」(II, 116) 見てくるように母親に言いつけられた子供がやってくる。隣人達は屋敷の庭のパーティーの様子をながめ、窓から飛び降りようとしたクリフォードを「何千人もの人」が見ていたのである(II, 235-36)。そして屋敷の向いの婦人は嵐の日にも関わらず、クリフォードとヘブジバーの逃亡を目撃しており、「二人はピンチョン判事の田舎の屋敷にでかけた」(II, 289) という噂を流している。屋敷に入るピンチョン判事を目撃した人々は、関係者よりも先に「ピンチョン判事が殺されて警察署長が捜査に乗り出す」(II, 295) という噂を広めており、それを聞いてつめかけた「群集」は、「呪いの成就」の再現を確認しようと待ち構えている。フォークナーの「エミリーの薔薇 (“A Rose For Emily”）」(1930) で、没落貴族のエミリーと彼女の屋敷が良くも悪くも共同体の人々の関心と郷愁の対象になるように、セイレムの人々は今も昔もピンチョン家に強い関心を持ち、常に彼らを監視し、「呪いの成就」という噂を広め、共通の記憶を更新していく「群集」なのだ。

一方、こうしたセイレムの「群集」の性向を利用して、ジェフリー判事は噂を操作している。脳卒中で死んだ判事に対して語り手は「その日のゴシップに耳を傾けたり、必ずや明日のゴシップの種となるに違いない深いもくろみを含んだ言葉をなにげなく口にしたらしめないのだろうか」(II, 270) と問いかける。彼は日頃から噂に注目し、みずからゴシップの種を蒔いて人々を操る術を心得ていたのだ。語り手が「ピンチョン一族は彼ら独特の明確な特質を備えていたとはいえ、それでもやっぱり、自ら住んでいた小さな共同社会の一般的な特徴を身に着けていた」(II, 21) と述べるように、ピンチョン一族と村の人々は共同体の構成員として、噂によって呪いを新たに成就させる点において共犯関係にあり、互いに利用されたり利用しつつ、一族と共同体のアイデンティティを維持し強化しながら二世紀にわたるセイレムの歴史を形作ってきたのである。

4. 「呪いの解体」とプロヴィデンス

呪いの本質がどうあれ、こうして『七破風の屋敷』はピンチョン家の呪いの成就の物語としてプロットが展開される。監獄から釈放された兄クリフォードを迎えるために、ヘプジバーは屈辱感に耐えながら1セントショップを開くも上手くいかない。遠縁のフィービーと下宿人のホルグレイヴの助けによって、ささやかな幸福が一時訪れるが、ジェフリー判事の強欲の前に暗雲がたちこめる。ジェフリー判事が血を吐いて死ぬと、殺人の嫌疑をかけられることを恐れて老兄妹は逃げ出すが、結局死体のある屋敷に戻らざるを得ず万事休すとなる。こうして、ピンチョン家にふりかかってきた災いが再来し、新たな呪いが成就すると思われた時、急転直下、屋敷に戻ったホルグレイヴとフィービーに救われ、さらに二人の結婚によってモール家とピンチョン家の和解が成され、物語はハッピーエンディングで終わる。

この唐突で不自然な問題解決はしばしば物語の欠陥として批判されてきたが、実は、第二章の当初から語り手は、呪いを解体するプロヴィデンス、すなわち神の計画があることを仄めかし始めている。そして強固な呪いの物語の枠組みが、ヘプジバーの意識内において揺らぎはじめることが示唆される。彼女の心の内を覗く語り手は、彼女に対して同情的な態度を示し、一貫して、呪いの物語とは違ったプロヴィデンスの計画があることに度々言及するのだ。そして、語り手の主体に巻き込まれた読者も同様に、物語の中の「群集」が知ることもない、プロヴィデンスの計画とヘプジバーの意識を語り手と共有することになる。その「呪いの解体」のプロットが展開する様子を次に見ていきたい。

当初、ヘプジバーは下宿人のホルグレイヴや遠縁のフィービーを幾分見下している。1セントショップを開くヘプジバーを励まそうと労働を賞賛するホルグレイヴに対して彼女は、「少しばかり感情を害された威厳」を示し、自分が「貴婦人」として生まれたことを強調する (II, 45)。また、身分違いの女性との結婚でピンチョン家を離れた父を持つフィービーに対して、ヘプジバーは、「日取りの予告や、歓迎されるかどうかを尋ねもしないで」訪ねて来るとは「なんという田舎者なのでしょう」(II, 69) と彼女を見下している。

しかし語り手は、本当のヘプジバーは、ピンチョン特有の強欲や冷酷さを持たず、その情緒の中に「何よりも最も温かい奥まった部分」(II, 34) があると述べる。そして「頭上にある全てを包含する思いやり」すなわち神への信頼を持つようにと、ヘプジバーには聞こえない声で呼びかける (II, 41)。ヘプジバーは、無意識の内に天上のプロヴィデンスにしかめ面を向け (II, 53)、金持ちの貴婦人に嫉妬してプロヴィデンスに不服を感じる (II, 55) が、それを懺悔して心の中で許しを請う。そうした彼女について語り手は「間違いなく神は彼女を許した」と述べる (II, 55)。さらに、語り手は、ヘプジバーの生来の「崇高で寛大で高貴なもの」と「貧困によって強められ、悲しみによって引き出され、人生に対する強く孤独な愛情によって高められた英雄性」を称え (II, 133)、「自分のためには何も願わないがクリフォードに一身をささげる

機会だけはプロヴィデンスに願ってきた」彼女に、神が善を計画していることを示唆する (II, 133)。

ヘブジバーが、呪いの本質や神の存在を真摯に考え始めるのは、執拗なピンチョン判事に対峙し、その判事の死によって窮地に立たされた時である。このときまでにフィービー、ホルグレイヴやヴェナー爺さんに対する感謝と共感を抱くようになっていた彼女は、ピンチョン一族が持つ欠点を直視するようになっていく。そして彼女はジェフリーに、人間としての温かみや憐みを欠く彼の残酷さを諫め、「そういう冷酷な、貪欲な精神こそ、悲しいことに、この二百年間、私たち一族の血に流れてつづけてきたもの」だと訴える (II, 237 傍点筆者)。彼女はピンチョン家の災いが、過去の先祖の悪行が招いたモールの呪いの結果ではなく、自分達の心が引き起こしてきたものだという気づきを切実に訴えるのである。

彼女の説得も空しく、孤立無援の立場に置かれたヘブジバーは自身に降りかかる災難を、「神が、人間同士が互いに助け合うようにと定めた援助を自分が頑固に投げ捨ててきた」罰だと考える (II, 245 傍点筆者)。そして「このような孤独な魂の小さな苦悩」(II, 245) に神の慰めは届かないだろうとあきらめるのだが、それに対して「暖かい日差しが全ての小さな家の窓にさすように、神の人間に対する配慮と憐れみという愛の光はひとりひとりの必要に対して向けられる」(II, 245) と、語り手は、神の慈悲が彼女に向けられることを示唆する。屋敷からの逃亡に失敗したヘブジバーは、今こそ神を疑っている時ではないと悟り、「天から見下ろす全能の神」に「われわれはあなたの子供ではないのでしょうか。慈悲をわれわれにお持ちください」と心から祈る (II, 267)。そして物語は急転直下、ハッピーエンディングへと向かう。「機械仕掛けの神」と批判を呼ぶ結末であるが、ここには、ヘブジバーが呪いの本質に気づき、一族の間違いを悔い、真摯な信仰心を取り戻し、運命を神に委ね、回心に至った彼女に文字通り神が救済の手を差し伸べる、という経緯が描かれており、不十分な展開とはいえ、個人と神の契約の回復という宗教的なプロセスを経ての結末だといえよう。

このように『七破風の屋敷』には、語りによるプロヴィデンスへの言及によって展開される「呪いの解体」に向かうプロットが組み込まれているのだが、そもそも、呪いの発端となった初代ピンチョンの行為がプロヴィデンスに反するものであることが序文で示唆されている。彼は「先見の明があり判断力にすぐれた (provident and sagacious)」(II, 18) 人物だと描写されるが、“provident” は “providence” の派生語であり、“sagacious” が持つ「正しい判断を成す」という意味もまた、プロヴィデンスの性質を表している。そして彼は、強力な意志力で、「子孫を衰えさせ破壊する」(II, 17) 時の流れに抗って、一族繁栄の基盤を築こうとしたのであるが、時の経過に抗うことは、「人間の歴史を司る」プロヴィデンスに抗うことである。プロヴィデンスのごとき先見の明と判断力を持つと驕り、歴史支配を試みるピンチョン大佐の思惑は神への冒瀆的行為であったといえる。ラパチニヤイーサン・ブランドと同様に、彼も想念の虜となって神の領域に踏み込む罪を犯したのだ。ホーソーンは、人間の傲慢が作った「呪いの成就」とい

う人為的な歴史の枠を壊し、人間世界を創造したプロヴィデンス本来の計画に物語を回帰させる「呪いの解体」というプロットを組み込んだのだ。⁷⁾

5. 「群集」とホーソーンの距離

さて、『七破風の屋敷』の物語世界の創造を行ったプロヴィデンスとはその作品の“author”である。そして、序文で物語を予告し、本体の物語の歴史を展開させ、自らの創造物である登場人物に善をなす計画をすすめる語り手は、その“author”の意図を物語上で実行する役割を持つ。その語り手は、前述したように「書き手」と「読み手」の関係を構築し、「群集」との噂の共有に読者を巻き込む一方で、その「群集」とは距離を置き、「群集」の知らない神の計画を読者に提示するのだ。ここでは、こうした語り手と「群集」との距離に、デモクラシーにおける「個人」と「集団」という問題が提起され、そこにはまた作家と社会の関係性が投影されていることを見ていきたい。

ホーソーンは非社会的であったとみなされてきたが、そうしたイメージは、大学卒業後にセイレムの実家に引き籠って作家修行をしていた、いわゆる「孤独の歳月 (the years of solitude)」（Martine 8）に象徴されている。⁸⁾しかし、そのことが、作家の人間嫌いや孤立を意味するのではない。むしろ彼は大きに人間社会に対する好奇心を抱き、創作のモデルとすべく人々や社会の観察を行っていた。実際に「孤独の歳月」の間にも、近所で火事があると見物に出かけたりしており、姉のエリザベスは「彼は群集が好きだった (He liked a crowd)」（Mellow 46）と述べている。また、ホーソーンのいとこのハンガーフォードは“Hawthorne Gossips about Salem”（1933）において、1830年と1831年にホーソーンから受け取った手紙を引用し、セイレムの出来事を興味深く書き送るホーソーンの巧妙な筆致を紹介している。ホーソーンは妹のルーザや地元新聞から収集した親戚の近況や町の情報を、ユーモアを交えて描写するのだが、その話題は、いとこの結婚のアドバイスから、自殺や殺人、死の願望の恐怖などの人間の魂の苦悩にまで及んでおり、作家の人間に対する好奇心や深い共感が見てとれる。また、「～だそうさ」、「～らしい」、「噂によると」といった語で噂話を伝えるスタイルは、『七破風の屋敷』の語り手を彷彿とさせるものとなっている。『七破風の屋敷』の噂をするセイレムの「群集」は、時に粗野な俗人として描かれるが、作家自身がまさにゴシップ好きで噂を広めるその「群集」の構成員であったのだ。

しかし、ハンガーフォードが指摘するように、ホーソーンが伝えようとしたことは、単なる情報や感情の発露ではなく、彼の鋭い人間観察が捉えた心の真実である。その意味で、噂をする「群集」の構成員でありながら、一方でその「群集」と距離を置き、「群集」には知りえない、ヘブジバーの心の内や善なる神の計画を読者に告げる『七破風の屋敷』の語り手とホーソーンの距離は限りなく近いといえる。語り手は時には「群集」側の視点に読者を巻き込み、時には

「群集」と距離を置く視点を読者と共有するのだが、こうした語り手を通した視点の揺らぎには「集団」と「個人」の関係性に対するホーソーンの問題意識が提示されている。

これまでの『七破風の屋敷』の批評では、「集団」と「個人」というよりは、むしろ「大衆」対「エリート」という対比の図式が指摘されてきた。ピンチョン家が植民地の権威である17世紀では、その屋敷の落成式に招かれる客は「貴族」と「平民」ではっきりと入口が区別されている。こうした対比は、物語の現在となる19世紀では、ジェフリー判事と彼に対抗するヘブジバーの一派という対比へと変容し、そこに19世紀のホイッグ党と民主党の対立が描かれていることが指摘されてきた。そして、物語の結末が示す通り、ホーソーンは後者の雑多な集団に軍配を上げており、「民衆は全体としてはバランスのとれた判断を選ぶ」という『緋文字』で提示された、作家のアメリカン・デモクラシーにおける民衆への期待が『七破風の屋敷』でも再現されているといえる。しかし『緋文字』のヘスターが最後まで「群集」とは一線を画していたのとは異なり、『七破風の屋敷』では、孤立していた人々が新たな「群集」を形成するプロセスが描かれており、「集団」を形成する「個人」の在り方により重点が置かれていることがわかる。

『七破風の屋敷』の屋敷の窓から見える政治パレードに向けた語り手の言葉には、こうした「集団」と「個人」の関係性に対するホーソーンの見え方が端的に示されている。語り手は、パレードを構成する人々を近くで見ると、その顔つきは「退屈なほどに平凡」であり、「ばかの演ずる芝居 (fool's play)」に見えるという。そしてパレードの壮麗さを味わうには「どこか地の利を得た場所」から眺める必要がある (II, 165) と、手厳しい皮肉を投げかける。ミルズが指摘するようにホーソーンは個人が集団に埋没し、集団と一体化してしまうことを危惧するのだ。ピューリタンの原罪観に意識的なホーソーンは、人間は自らの不完全さを知って自己改革に務めるべきであり、デモクラシーにおいても社会改革においても、それを遂行する集団は、個人の知恵と判断が生きる集団でなければ、衆愚に終わるという懸念を示すのだ。前述したように、ジェフリー判事は隣人監視と噂好きなセイレムの住民の性向を利用してゴシップの種を流し、彼らの言動を操作しているが、彼らのような権力者に扇動されたら、「民衆の声はそれがいくら大きな声でも、これらの伸士達が声をひそめてしゃべる言葉の反響」 (II, 274) にすぎなくなると語り手は警告している。

『七破風の屋敷』が出版された1851年は、「プロヴィデンスによって割り当てられた大陸に拡がる明白な使命」をスローガンに獲得した領土、カリフォルニアで発見された金鉱に人々が殺到するゴールドラッシュの只中であった。こうした背景を反映して、ホーソーンはヴェナー爺さんに「大財産を築きあげようなどと」すれば、「神様 (Providence) に心をかけてもらう資格」がなくなる (II, 156)、と言わせている。デモクラシーの集団を構成する個人は「つぎはぎ学者」 (II, 155) であるヴェナー爺さんのように、バランス感覚を有する経験豊かな知恵者、ヘブジバーのように温い心を持つ穏かな自己変革者であることが必要なのだ。ホーソーンは「群集」に属しながら、そこに埋没しない「個人」の在り方を提示し、「語り手」と「群集」の距離

の揺らぎに読者を巻き込むことで、新国家アメリカのデモクラシーの「群集」の構成員である読者に、「集団」における「個人」の在り方という問題を提起しているといえる。

セイレムに生まれ育ったホーソーンにとって、「群集」とは、第一義的にセイレムの町の人々であり、何より彼自身の中に、ピューリタンに起源をもつセイレムという町が育てた、詮索好きで噂好きな「群集」の一員としてのアイデンティティを見出していたといえる。しかし、彼は、その「群集」に埋没することなく、社会の周縁に立ち、人々の心の真実や「群集」からは見えない俯瞰的景観をテキストに写し取り、読者に対してアメリカ社会への問題提起を行った。また、ホーソーンにとって、共同体を構成する独善的なエリートも衆愚に陥りがちな民衆も懸念の種であると同時に、彼の創作のモチーフやテーマを提供してくれる馴染みのある「群集」でもあった。物語における噂をする「群集」の存在、ならびに、物語を通して行われるプロヴィデンスへの言及によって展開される「呪いの成就」と「呪いの解体」という矛盾するプロットを含む『七破風の屋敷』の二重の構造には、作家ホーソーンの世界との関わり、そして「集団」を構成する「個人」の在り方という作家にとって重要な19世紀アメリカの問題が提起されているといえる。

※本稿は2015年7月4日、龍谷大学で開催された日本アメリカ文学会関西支部例会におけるシンポジウム「ホーソーンと群集」の発表原稿に加筆修正を施したものである。

註

- 1) ホーソーン作品からの引用は *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* を用い、本文中の括弧内に巻号と頁を記す。また邦訳については大橋健三郎訳『七破風の屋敷』を参照し、必要に応じて改訂を加えた。
- 2) 序文と本体の矛盾に加え、呪いの物語が急転直下、唐突にハッピーエンディングへと向かうストーリーについて、例えばマシーセンは「何となく安易にすぎる」(8)と述べ、作家の人生経験の不足によるものとする(335)。また宗教的解釈を行うガッタはキリスト教の黙示録的世界を現代のエデンに描こうとして失敗したとする(48)。スターンはホーソーンが市場原理を考慮してヴィクトリア朝的な価値観を結末に反映させたのだとしている(xxx)。
- 3) プロヴィデンス(Providence)は神の摂理と訳されるが、その概念は古代ギリシアに由来し、元来は人間の「予見する」能力を指した。次第に神の「先見の明」を意味するようになり、ギリシア哲学では宇宙と自然の秩序を統合する唯一なるものを指すようになる。その後、キリスト教に取り入れられたプロヴィデンスは「神が創造物に対して向ける予見的配慮」と「神」そのもの、すなわち神自身とその神の人間に対する配慮の両方を意味する言葉として用いられることになる。『七破風の屋敷』でも双方の意味で使われており、本論では「プロヴィデンス」と表記することにする。
- 4) 例えば エステイーヴは、膨大な数の人間の集団が条件となる「都市の群集」に論を絞り、都市の雑踏が舞台となるポーの「群集の人(“The Man of the Crowd”)(1846)やホーソーンの「リンゴ売りの老人(“The Old Apple Dealer”)(1846)、「ウェイク・フィールド(“Wakefield”)(1835)などを考察している。同じく植田和文も「近代都市の萌芽期」に焦点をあて、その「群衆」を「孤独」や

「都市の迷路をさまよう心の迷路」を表象するものと位置付けている。また高野泰志は都市の出現に伴う読書の質の変化に注目し、「群衆」に劇場の観客としての機能を見出して作品のメタフィクション性を論じている。

- 5) アンダーソンは酒場、学校、劇場、教会、総督邸などの人々の集団を個別にとりあげ、その「群衆」の描写がもたらす視覚的、聴覚的効果、あるいは心理的効果と機能、テーマを論じている。ジフは、デモクラシーの民衆、あるいはそのデモクラシーが進行するアメリカを表象する文学にアメリカ文学の独自性を見出し「文化的独立の宣言」という副題を著書に添えている。ミルズは自己が埋没する集団としてではなく、個人のアイデンティティが立ちあがる場としての「群衆」という観点から、「個人」が「集団」と一体化することを危惧するホーソーンが描く「群衆」にその意義を読み取っている。ハーシュバガーはホーソーン作品の「噂」「ゴシップ」を流す人々のメンタリティにセイレムの魔女騒動との相関性を見出し、ホーソーンの「群衆」を共同体の集約的記憶を共有する「個々人の集団」であるとしている。エステーヴについては註4を参照。
- 6) 高尾直知は「僕の親戚モーリノー少佐（“My Kinsman, Major Molineux”）」（1832）における「暴徒」の儀式性に注目し、ホーソーンの描く群衆の特徴を論じている。また丹羽隆昭の「ホーソーンと民主主義」はジャクソニアン・デモクラシーとホーソーンとの関係より、エリートよりは民衆のバランス感覚に軍配を上げるホーソーン作品の表象を論じている。
- 7) 作品では人為的な歴史である「呪いの物語」を解体し、幸運な結末を導くプロヴィデンスの計画が準備されているが、この構造は「プロヴィデンスの計画」として領土拡大と金鉱発見に沸く現実世界の行く末を逆説的に暗示するアンチテーゼとなっていると考えられる。この議論については *Hawthorne's Dual Narratives in His Four Romances: Providence and the Multiplicity of Its Literary Use* (Nakanishi) の第3章を参照のこと。
- 8) ホーソーンは大学卒業後、約12年間、セイレムの実家の書齋で作家修行を行ったが、これについて1841年に婚約者ソファイアに宛てた手紙で次のように述べている。「もし伝記作家が私の伝記を書くとしたら、私の記憶に残るこの部屋について大いに言及すべきだろう。あまりにも多くの孤独な青春をそこで無駄にしたのだから」(XV, 494)。この12年に及ぶ隠遁時代に言及する際に、作家の伝記を書いたマーティンは“the years of solitude”と称し、メロウは“The Long Seclusion”という章を、またスチュワートは“The Solitary Years”という章を設けている。

Works Cited and Consulted

- Anderson, Jr., D. K. “Hawthorne's Crowds.” *Nineteenth-Century Fiction* 7. 1 (1952): 39-50.
- Esteve, Mary. *The Aesthetics and Politics of the Crowd in American Literature*. New York: Cambridge UP, 2003.
- Gatta, John, Jr. “Progress and Providence in *The House of the Seven Gables*.” *American Literature* 50 (1978): 37-48.
- Harshbarger, Scott. “A ‘H-LL-Fired Story’: Hawthorne’s Rhetoric of Rumor.” *College English* 56.1 (1994):30-45.
- Hawthorne, Nathaniel. *The House of the Seven Gables*. Ed. Thomas Woodson et al. Columbus: Ohio State UP, 1980. Vol. 2 of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. William Charvat, gen. ed. 23 vols. 1962-97.
- Hungerford, Edward B. “Hawthorne Gossips about Salem.” *The New England Quarterly* 6.3 (1933):445-69.
- Martine, Terence. *Nathaniel Hawthorne*. Rev. Boston: Twayne, 1983.
- Matthiessen, F. O. *American Renaissance: Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman*. New York: Oxford UP, 1941.
- Mellow, James R. *Nathaniel Hawthorne in His Time*. Boston: Houghton Mifflin, 1980.

- Mills, Nicolaus. *The Crowd in American Literature*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1986.
- Nakanishi, Kayoko. *Hawthorne's Dual Narratives in His Four Romances: Providence and the Multiplicity of Its Literary Use*. Dissertation, Kyoto University, 2010. <http://hdl.handle.net/2433/131897>
- Stern, Milton R. Introduction. *The House of the Seven Gables*. By Nathaniel Hawthorne. New York: Penguin, 1981.
- Stewart, Randall. *Nathaniel Hawthorne: A Biography*. New Haven: Yale UP, 1961.
- Ziff, Larzer. *Literary Democracy: The Declaration of Cultural Independence in America*. New York: Penguin, 1981.
- 植田和文『群衆の風景』南雲堂 2001 年
- 高尾直知「どうしてロビンは笑ったのか—「僕の親戚モーリノー少佐」における暴徒表象」『抵抗する言葉—暴力と文学的想像力』藤平育子監修 南雲堂 2014 年
- 高野泰志「さらし台と個室の狭間で—ナサニエル・ホーソーンのマタフィクションの試み」『アメリカ文学研究』第 51 号 2015 年
- 丹羽隆昭「ホーソーンと民主主義」『アメリカ民主主義の過去と現在』紀平英作編著 ミネルヴァ書房
- ホーソーン, ナサニエル『七破風の屋敷』大橋健三郎訳 筑摩書房 1970 年
- ル・ボン, ギュスターヴ『群衆心理』櫻井成夫訳 講談社 1993 年

Hawthorne's "Village Gossips" in *The House of the Seven Gables*

— A Foretold Curse and an Abrupt Happy Ending —

Kayoko NAKANISHI

Abstract

The preface of Hawthorne's *The House of the Seven Gables* provides an ominous notice about the story. The story, however, closes with an abrupt happy ending through the use of "deus ex machina." Critics are quick to point out these qualities as flaws of the romance. However, when focusing on the rumors spread and handed down by curious neighbors in Salem and the narrator's frequent references to Providence, we can uncover the author's clever strategy of constructing "a double plot" in the story. The main plot is developed through rumors toward fulfillment of the foretold curse, and the obscure one is literally led by god toward the story's happy ending. This dual structure shows the narrator's ambiguous viewpoints. Sometimes he, like the village people, circulates rumors, and sometimes he is diverted from the role and alludes to another plan of Providence inscrutable to the townspeople. The narrator's shifting position reflects the relationship of the author to the society. Hawthorne, as one of the curious neighbors in Salem, observes others from a distance to find "the truth of the human heart" and crystalize this into his tales and romances.

Keywords: a dual structure, Hawthorne and society, Providence, gossips, Salem